
夏目友人帳～触れ合う二つの孤独～

水夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏目友人帳〜触れ合う二つの孤独〜

【Nコード】

N6316Y

【作者名】

水夏

【あらすじ】

他人に依存せず、孤独である事を何よりの矜持している猫の妖怪、玉梓。そんな玉梓の元に、ある日一人の少年が現れる。その少年は、生前夏目レイコが所有していた“夏目友人帳”を所持していて……。

前編

家族や友人だなんて存在は、生きていく上で全く必要の無い存在だ。

猫の妖あやかしである玉梓たますきは、常日頃からそう考えている。

否、そう悟っていると表現した方が適切か。

玉梓にとって、孤独でいる事は極当たり前の現象に過ぎないし、寂しいなどと思った事すら微塵もありはしない。

そもそも、他人（この場合で言う“他人”とは妖怪の事である）と馴れ合う奴らの気が知れない。いや、元来妖怪は群れを為さずに独りで生きていく者の方が多いし、群れを為す自体必要の無い種族ばかりで占めているハズなのだが、それでも他の妖怪と連む者をよく目にするのである。

それは、一抹の寂しさからなのか。

それとも、力の強い他者に依存する事によって、自身も強い者だと錯覚したいからなのか。

どちらにせよ、くだらない奴らだと思う。あまりの滑稽さに鼻で笑ってしまうくらいだ。

それではまるで、人間と変わらないではないか。

愚かで矮小で 群れを為さなければ何も出来ない、弱くて惨めな畜生達と何も変わらない。

ワタシを慈悲無く捨て去った、あの人間達と……。

故に、玉梓はいつでもどこでも孤独で。

そして、何より孤高であった。

そんな自分を誇りに思っているし、改める気もさらさら無かった。親しき者なんぞ、これからもこれから先も、永劫に必要無い。

そう思っていた。

そう、あの少年と出逢うまでは ……。

「今日は良い天気だ……」

どこまでも澄み切った青空が、木漏れ日の向こう側で蒼然と広がっている。木々を縫うように漏れる光の粒子が、玉梓の着用している紅葉柄の着物を色鮮やかに照らす。仄かに温かい陽光が、十一月の寒々とした空気によって冷えた骨身に染み込んで、とても心地良い。

いつもように、お気に入りの場所である大木に寄りかかりながら、玉梓は軽く両腕を上げて伸びをする。と、同時に猫耳もピクピクと無意識下に微動してしまった。妖怪になる前からの癖みたいなものなのだが、天気の良い日は耳がよくピクピクと動いてしまう。別に嫌ではないし、特に治そうとも思っているワケではないのだが。

「……………」

玉梓は猫の妖怪ではあるが、見た目は猫耳に着物を着用しただけの人間（それも生娘の）に酷似している。いや、どちらかと言えば、猫耳を付けた人間そのものと言って過言ではない。玉梓も、妖怪になつてから初めて自分の姿を見た時は心底驚いたものだ。むしろあまりの嫌悪感に、吐き気すら催してしまった程である。

まさか、自分が一番意味嫌っている人間に近い姿になっているなんて、思いもしなかったから。

それが許せなくて、腹立たしくて 何より切なかった。

が、過ぎた事を悶々と悩んだところでどうにもならない。玉梓はそう諦観し、己の姿を妥協する事にした。第一、人間の姿に似ているからって、人間そのものになつたワケではないのだから。

それに今の玉梓は、昔のように誰かに依存しないと生きられないよな、弱くて愚かしい存在などでは決してない。

何より今のワタシは、人間なんかよりも遥かに高等な生き物 誇り高き妖なのだ。

人間とは違う。弱小な人間共とは、全然まったく。

「さつきからワタシは、何を人間人間とムキになっっているのだ……」
取り留めのなく、それこそ終わりの見えてこない思考を無理やり
頭を振る事によって打ち消し、フツと自嘲じみた失笑を漏らす。

どうでもいいではないか。人間の事なんぞ。せつかくの良い天気
なのだ。つまらない思慮に耽って気分を害してしまっなんてもった
いない。もっと実になる事を考えようじゃないか。

そうだ。こんな日は、今ワタシが寄り掛かっている大木の頂上ま
で登ってみるのはどうだろう。きつと晴れ晴れとした素晴らしい状
景が見れるに違いない。おお、我ながら良い考えだ。

そう独り決断して、さて、それではよじ登ろうかと腰を浮かしか
けたその瞬間

「わっ!?!」

「ぎゃ!?!」

何か大きな物体が突如として玉梓に勢い良くぶつかり、そのまま
玉梓を下にして覆い被さつて来た。

「な、何だ!?! 一体何事なのだこれは!?!」

視界を唐突に遮られ、慌てふためく玉梓。匂いからして人間のよ
うではあるが、しかしながら人間が妖怪である自分に触れられるハ
ズがない。

ならば、今尚こうして自分にもたれ掛かっている物体は、一体何
者……?!

「いてて〜。あ、その猫耳、お前妖怪か? いきなり飛び出したり
してすまない。今、他の妖怪に狙われてて ツ!?!」

と、目の前の人間(?)が謝辞を述べ始めた途端、何かしらの気
配に反応しての行動か、とっさに玉梓の口を手で覆い、大木を背に
して身を屈ませた。

「む!?!? む!?!?」

「悪い！ 少しの間だけ静かにしていてくれ……！」

不意に口を閉ざされ、言葉にならない苦悶を上げる中、人間は息を殺すように音量を抑えて玉梓に言い聞かせる。

何故ワタシが人間（らしき物体）なんぞの言いなりにならないければならないのだ！ と胸中で憤慨しつつ手足をばたつかせて抵抗を試みるも、人間の力は予想以上に強く、あっさり両腕を封じられてしまった。見た目はひよろりと華奢なクセに、油断ならない奴だった。

仕方なく抵抗を諦めて、目の前の人間と同じく息を潜めていると、『ドコダ人間！ ドコニ逃ゲタアア！』

というおどろおどろしい怒声が、ドシンドシンという地鳴りと共に響いてきた。気配からして、そこそこ恰幅のある妖怪と思われるその声は、玉梓達のいる場所から数十歩先ほどからの距離から聞こえてくる。どうやら、まだこちらの存在には気付いていないようだ。玉梓の匂いに紛れて、そばに人間の匂いが中和されている事もあってか、鼻がイマイチ利いていないのかもしれない。

出来ればどんな妖怪か把握しておきたいところなのだが（妖怪によつては、同じ妖怪に危害を加える輩もいるので）、如何せん本意ながら身動きの取れない状態に置かれてしまっているので、様子を見る事さえ叶わなかった。

コイツ、あの妖怪に追われているのか……？

一瞬、声を上げて人間の存在を知らしめようという考えが頭の片隅によぎったが、そうするとこの人間がどんな暴拳に出るかも分からないし、あの妖怪も案外イカれたヤバい奴かもしれない。ここは変に逆らったりせず大人しくしていた方が無難か。

そう思い直し、しばらく黙してそのままの状態を維持して待機している、離れた距離にいた余所の妖怪は周囲を探るように数歩だけ足を枯れ葉で鳴らした後、結局諦めてしまったのか、自分達の方とは真逆の方向へと歩き去ってしまった。

妖怪が歩き去った後も、用心深く木の幹から少しだけ顔を覗き出

して、人間は外の様子を警戒して辺りに視線を巡らす。そして完全に妖怪がいなくなったのを確認してから、人間は安堵したように深い嘆息を吐いて、ようやく玉梓から離れた。その事に玉梓もホッと一息吐きつつ、改めてまじまじと目前の生物を観察する。

セピア色のさらさらとした髪に、比較的整った中性的な顔立ち。どこことなく達観した、しかし人の良さそうな優しい光を帯びた瞳。そして学び舎の帰りだったのだろうか、黒々とした学ランを若干着崩した状態（ここまで逃げて来た過程で乱れてしまったのかもしれない）で着用している。

姿形、匂いや雰囲気からしてどうやら人間に間違いなさそうだが、しかしながら、何故その人間が自分の姿を見る事が出来るのだろうか。本来ならば、妖怪の姿は人間に見えないはず。いや、中には見える才の持った人間もいるらしいが、さりとて触れる事すら出来ようなどとは心底解せない。全くもって不可思議極まりない奴である。この人間、一体何者なのだろうか？

「ふう。あー、いきなり飛び出したりして悪かったな。なにぶんさっきの妖怪に突然襲われて、慌ててここまで逃げて来たもんだから……………」
と、人間が呼吸を整えてから改めて謝りを入れ始めた途端、不意に向けた視線を玉梓に固定したまま動かなくなってしまった。まるで信じられないモノでも見たかのように、驚愕に眼を見開いた状態で。

「なんだ。不躰にヒトの顔をジロジロと見て」
「あ。いや、悪い。ちょっと知り合いに似てたものだから、ついな」と、気まずい調子で頬を掻いてみせる人間。その反応にフンと鼻息を鳴らしつつも、まあ別にどうでもいいかと玉梓は溜飲を下げる。
「それよりも、ワタシの姿を見れるだなんて、貴様は一体
「やれやれ。まーた妖に襲われていたな夏目^{なつめ}」

人間の正体を訊ねようとしたその時、近くの茂みからガサガサと猫と表現するには輪郭が丸過ぎる、なおかつ不気味な目つきを

した何かが這い出て来た。そんないかにも珍妙な、元同族とは思えない猫を見て、

「ひゃ！？ 何だこの薄気味悪いブタ猫はッ!?」

と、玉梓は体裁も気にせず悲鳴にも近しい大声を上げる。

「な!? この高貴な妖者あやかしのである私に向かつてブタ猫とは無礼な!

お前みたいな低級なんぞ、私にかかれば容易く一捻りで」

「先生! ニヤンコ先生じゃないか! 何でこんな所に?」

顔見知りだったのだろうか、玉梓の言葉を聞いていきり立っていたブタ猫、もといニヤンコ先生と呼ばれたそれは、人間に訪ねられた事によつてハツと正気に戻ったのか、

「たまたま近くを通りかかったらお前の匂いがしたのでな。同時にそこにいる妖とは違う、そこそこ力の強い妖者の気配も感じたから、ちよつと様子を見に来てやったのだ」

と呆れたように目を細めて言の葉を紡ぐ。

「まあ、どうやら私の出番は無かったようだがな。まったく、お前という奴は毎度のごとく妖に容易く目を付けられおつて。無論、友人帳は無事なのだろうな?」

「ああ。どうにか捕まる前に撒けたからな」

と、人間は大事そうに抱えていた鞆をこれ見よがしにパンパンと叩く。ニヤンコ先生の言つた友人帳とやらは、人間が持っている鞆の中に入っているらしかった。

ん? 待てよ? “夏目”? “友人帳”……?

そこで玉梓は、ハツとある事実気が付いた。

そうだ。“夏目友人帳”。風の噂を小耳に挟んだにわか知識ではあるが、確か昔、夏目レイコとかいう人間が、妖怪を負かして無理やり名前を書かせた契約書の束。曰わく、それさえあれば、名前の書かれている妖怪ならばどんな奴でも使役出来るのだとか。だがその夏目レイコも既に他界し、その孫が引き継いだとも噂で聞いていたのだが、まさか目の前にいるこの人間がその夏目レイコの孫だったとは。

なるほど。道理でワタシの姿が見えるだけでなく、触れる事も出来るワケだ　と独り玉梓は合点を打った。生前、夏目レイコはかなり妖力が強かったというし、その血を引く孫がその才を受け継いでいたとして、何ら不思議ではない。

ま、ワタシには“友人”帳なんてふざけた代物、さして興味は無いが。そう玉梓は胸中で吐き捨てた。妖怪の中にはあれを喉から手が出るほど欲しがる奴がいるみたいだが、まるで理解に苦しむ。なるほど、確かに他の妖怪を使役するというのは魅力的なのだろうが、今日に至るまでひたすら他人に縋らず、孤独であり続けた玉梓にとっては、別段不要な代物に過ぎない。

「ほんと先生つて、肝心な時に限っていなかったりするよな。おれの用心棒のくせに」

「ふん。四六時中お前の面倒なんて見れるワケなかるうが。そもそも、私は友人帳さえ手に入れさえすればそれでいいのだ」

「だから仮におれが妖に殺されたとしても、友人帳が手に入ればいって言うのか？　なるほど、じゃあ仕方ないか」

と言って、握りしめた拳に熱い吐息を吹きかけて見せる夏目。どうやら、約束を反故にしようとしているニャンコ先生に鉄拳制裁を加えるつもりでいるらしい。全然仕方がないようには見えない。

そんな夏目の様子を見て、

「ま、まあ人の一生なんぞ妖の私にしてみればあっという間だし、それまで面倒を見てやるのもやぶさかではない」

と、目に見えて夏目の鉄拳制裁にビビって前言撤回するニャンコ先生だった。

「さて、と。そろそろ早く帰らないと。塔子タコさんが心配してしまうな……」

「おお。そういえば今日はハンバーグだとか言っておったぞ。ちゃんと私の分を残せよ夏目」

「……猫は玉ねぎ食べたらダメなんだぞ？」

「だから私は猫ではないと言っとるうに！」

何やら漫才じみた事をしつつ、ニヤンコ先生を抱えて立ち上がった夏目が、「それじゃあな」と微笑を浮かべながら手を降って背中を向ける。

「……ふん」

結局、玉梓は返事をする事も手を振り返す事もせず、遠ざかっていく夏目の背中を一瞥だけして、瞼を閉じた。

やれやれ。騒がしい奴らだった。ワタシの安息を邪魔しおつてからに。

「まあ、もう逢う事は無いだろう」

ぼかぼかと暖かい陽光を肌で感じつつ、ようやく訪れた静寂に、玉梓は安堵の溜め息と共にその言葉を漏らした。

しかしその翌日、玉梓の予想は見事に裏切られる事となる。

「よお。また会ったな」

あやかし
妖が見える奇妙な人間

もとい夏目レイコの孫と唐突な形で遭遇してしまったその翌日。もう逢いまみえる事も無かろうと思っていた彼の人物が、何故だか朗らかな笑みと共に片手を上げて挨拶をしてやって来た。どうやら、用心棒であるあのブタ猫……ニヤンコ先生は一緒ではないらしい。

そんな独りでのこのことやって来た夏目に対し、毎度お馴染みであるお気に入りの大木で日光浴を堪能中だった玉梓は、思わぬ珍客に眉根を寄せて怪訝な視線を送りつつ、

「こういう場合、お前から会いに来た　という表現の方が正しくないか？」

と、今日も学校帰りだったのか、学生服姿の夏目に若干皮肉を込めて言葉を返した。

「はは。そうかもしれないな」

夏目は他人事みたいにそう一笑した後、「隣り、いいか？」と玉梓のすぐそばを指を差して断りを入れてきた。どうやら、ここに居座るつもりでいるようである。

この人間、目の前にいる奴が妖怪だと分かってそんな言葉を吐いているのだろうか？　大抵の人間は、自分達のような異形なモノを災厄の元として忌避したがる者ばかりだというのに。やはりあの傍若無人とも呼称された夏目レイコの孫だけあって、肝が据わっているのだろうか。何にせよ、おかしな人間である。

「なんだ？　何かワタシに用でもあるのか？　大した用でないのなら、独りにしてもらいたいのだが」

わざわざ用も無くこんな鬱蒼とした森の中にまで会いに来たりは

しないハズ。例えあったとしても、こんないるだけで邪魔な奴、適当な事を言っさつさと追っ払ってやるが。そういつた意味も兼ねて放った質問に対し、「いや、別に用があつて来たとかじゃあないんだが……」と少し困つたように頬を掻く夏目。

「何て言うか、お前ともう一度話をしてみたくなつてな。その……迷惑、だったか？」

「……人の子は好かんのでな」

「そ、そうか」

言外に今すぐ立ち去れという真意が伝わつたのか、夏目は終始残念そうに目を伏せた後、すごすごと踵かかとを返す。

「やれやれ。これで独りになれる　そう思つて瞼を閉じた途端、

「なあ。お前、名前は何て言うんだ？」

と、てつきり既に姿を消したと思つていた夏目が、顔だけを玉梓に向けて不意に名前を訊いてきた。

「何でまだいるんだ……と辟易した気分になりつつも、玉梓は溜め息を吐いて言葉を発する。

「そんな事を訊いてどうする？」

「いや、単なる興味本位の質問に過ぎないんだが……」

そう頭を掻いて所在無さそうに視線を四方に巡らす夏目に、玉梓は再度深い嘆息を漏らす。

バカかこの人間は。よく分からない相手に、容易く名前を教えるワケなかるうが。腐つても奴は夏目レイコの孫。下手をして妙な術でも掛けられるかもしれない危険性を考慮すれば、そう安々と名前なんて教えられるものか。

と、そこまで思考し、途端に馬鹿らしく思えてきた。そんな器用な真似が出来るなら、昨日だって襲いかかってきた妖怪を軽くあしらつていたハズである。という事は、奴自体に大した能力は無いという事だ。夏目が持つ、“友人帳”さえ使わなければ、の話ではあるが。

とは言え、いつまでもこうして拮抗したままというワケにもいか

ないだろう。どうやら大した術も使えないようであるし、名前を明かしたところで大事には至らないだろう。ならば、さっさと名を明かして帰ってもらおうとしよう。というより、これ以上人間の相手なんぞしたくもない。

「……………玉梓だ」

もはや諦めの境地にでも入った心持ちで、玉梓はそうしつぶしと溜め息混じりに自分の名を開かす。

果たして、夏目の反応はと言うと。

「玉梓、か。良い名前だな」

「……………」

夕暮れの淡い光が差し込む中で、玉梓を見つめて柔和に微笑む夏目。その嘘偽りない およそ世辞すら含まれていないのではないかと思わせる夏目の言葉に、玉梓は思わず呆気に取られた。驚きのあまり、二の句も告げやしない。

『良い名前』だって？ 何を言っているんだコイツは。名前なんかにも良いも悪いも無いに決まっているだろう。名前なんて突き詰めれば記号に過ぎない。だから、名前なんかにも価値は無いし、自分で付けたこの“玉梓”という記号も、深い意味なんて無いのだ。

意味なんて無い。

意味なんて無いのに。

どうしてこうも、胸の中が熱くなるのだろう？

「なあ玉梓。毎日とは言わなくても、たまにならこっちに来ても構わないか？」

今までに無かった初めての感情に戸惑う玉梓に、夏目は気付く様子もなくそんな窺いを立ててきた。己の不可思議な感情に未だモヤモヤと思考が霞むが、一旦頭の端に追いやり、口を開く。

「何故そんな事を訊く。そんなにワタシと話したいのか？」

「いや、それもあるけどそれだけじゃなくて……………」と言葉を選ん

でか、一拍の時だけ間を開けてから続ける。

「何かお前がやけに気持ち良さそうにその大木に居座っているからさ。おれもお邪魔させてもらってもいいかな、とか。迷惑、か？」

「……………」

ジツと玉梓の顔色を窺って、玉梓を直視する夏目。確かにここは他所と比べて静かで温度差もなく、非常に居心地が良い。その為、暇があれば玉梓もよくここに足を運ぶほどお気に入り場所ではあるが、なぜそれを人間と一緒に過ごさなければならぬというのか。馬鹿も休み休み言えという気分だ。

ならば、ここは丁重に断るのが道理であろう。そもそもが妖怪である自分と人間である夏目。それは例えるなら水と油 絶対に相容れない者同士なのだ。無理に無意味に無闇に干渉し合うべきではない。

なに、至極簡単な事だ。一言『目障りだ』と言ってしまえば、それだけで済む話……………」

「……………」好きにしる」

「そつか。じゃあ、またな」

玉梓の返事を聞いて心底安堵したのか、夏目は満足げに微笑んで見せた後、手を振りながら去っていた。

再び玉梓独りきりになり、今までの雑音が嘘のように静まり返える。今や風にさらわれて枯れ葉が舞い落ちる音ぐらいしか聞こえない静寂とした空気が玉梓を包み込む。

「なぜワタシは、あんな事を……………」

夏目の後ろ姿を黙って見送った後、玉梓は訝しむように己の口元へと手を当てた。

そうして夏目は、度々玉梓の所へと赴くようになった。

とは言え、特に何をするでもなく、玉梓を真似て樹木に背を預け

て惰眠を貪ったり、気まぐれにポツポツと会話を交わす　そんな程度の付き合いでしかなかった。

しかし、一体何の心境の変化なのか、当初は疎ましく感じていた夏目の存在もだんだんと気にする事が無くなり、いつの日か隣りにいても気にならない存在となっていた。

あの人間嫌いの玉梓が、だ。

自分でもあつさり心変わりし過ぎだろうと、ふと何気ない時に苦笑を漏らす瞬間があつたりする。主体性が無いと言われても仕方ない有り様である。

だが敢えて言い訳をさせてもらうと、夏目は玉梓の知っている非道な人間達とは、どこか違っていているような気がするのだ。具体的にどこだと問われても答えに窮してしまうのだが。

しかしながら、あやふやとした表現で敢えて答えるならば、それは夏目の雰囲気せいなのかもしれない　そう玉梓は考えていた。

夏目はよく笑う。玉梓と他愛ない会話をしている時も例外なく。しかし、どこか嘘くさい。その時その時の仕草や言葉が、別に悪意があるワケではないが、妙に寂寥感を漂わせているのだ。

まるで何かを恐れているかのように。

まるで本音で触れ合うのを避けているかのように。

玉梓とはまた違う孤独な雰囲気　心の奥底に潜む影を背負っている気がしたのだ。

そう物思いに耽る内に、日に日に夏目の事が頭から離れなくなっていた。

何故アイツは、時折表情を曇らせたりするのだろうか。

何故アイツは、それでも笑顔になる事が出来るのだろうか。

何故アイツは、こんな人間嫌いの妖に、逢いに来たりするのだろうか。

そんな疑問ばかりが、玉梓の胸の内膨らむようになってしまっていた。

だから　……。

「どうしてお前は、妖であるワタシと一緒にいて平気でいられるんだ？」

夏目と初めて逢ったあの日から、早くもひと月が過ぎようかという頃。夕暮れの淡い穏やかな陽光が差し込む森の中、玉梓はいつもの所でいつものようにここへと足を運んで来ていた夏目に、常日頃から溜まっていた疑問を言葉として吐き出した。

当の夏目は拍子を突かれたようにキョトンとしてみせた後、

「何でそんな事を訊くんだ？」
と首を傾げる。

「何でも何も、ワタシ達妖怪はお前達人間とは相反する者同士だ。互いを避け、嫌い、拒絶し合う関係だ。かく言うお前も、ワタシ達妖怪に良い印象なんて全く無いのだろうか？」

「……………」
夏目は何も言わなかった。その沈黙を肯定と受け取って、玉梓は話を続ける。

「お前と時折言葉を交わしていて、何となくだがお前が妖に良い印象を持っていないのは気付いていた。現にワタシと初めて出逢った時も、他の妖に襲われていたぐらいだしな。そんなお前がワタシ達に好意を向ける道理などあるはずが無い」

夏目は以前として沈黙を保ったままだ。視線を玉梓から逸らしているのは、気まずさからなのか。それとも、もつと別の理由からなのだろうか。

夏目の様子をそれとなく気に掛けつつ、玉梓は抑揚なく口を開く。「それなのに、何故お前はワタシといられる。確かにワタシは他の妖と違って、お前の高い妖力に興味は無いし、お前の持つ友人帳にも眼中に無い。危害を加えるつもりも、わざわざ逢いに来る気もさらさらない。だからお前にとって、ワタシは無害とも言える存在なのだろう。だがだからといって、好意を向ける理由にはなりはしな

い

「妖に悪意を向けるならまだしもな。」

玉梓はそう言っただけで一呼吸置いた後、「お前は矛盾しているのだ」と揺らぐ夏目の瞳から視線を逸らさず見つめる。

「妖が嫌いなお前が、その妖であるワタシのそばにいる。あのブタ猫みたいな妖は聞くところによると用心棒らしいし、お前がそばに置いていても何ら不思議ではないが、何の互恵関係も無いワタシとは一緒にいる必要性など、本来ならば皆無のハズなのだ」

元を正せば、夏目は何故だか玉梓と話をしていたがっていた事から始まったのだ。そして今、こうして言葉少なめではあるが、ある程度会話をする関係（玉梓としては不覚にも）になっている。しかし、今になっても尚、夏目は玉梓から離れようとする気は感じられない。

それは、まだ何か伝えたい言葉を胸の内に秘めているからなのだろうか。

それとも、もっと別の複雑な理由からなのだろうか。

何にせよ、もう仮初めの馴れ合いは終いだ。

玉梓の矜持は、誰にも関わらず頼らず馴れ合わず、孤独であり続ける事。

その気持ちは、今でも変わらない。変えさせやしない。

“あの時” 妖となれ果てた時から、頑なに決めていた事なのだ。

夏目と他愛ない日々を過ごしていく内、些かその事を忘れかけてしまっていたようだ。

だから

「ワタシに逢いに来る理由も意味もどこにも無いのなら、お前はもう、ここには来るな」

これで、本当に終わりだ。

「ワタシは、人間が嫌いなんだ」

ザアアアア　と落ち葉の波が宙に舞う。風に攫われて彼方へと飛んで行ったあの枯れ葉達は、どこか遙かな大地目指して空を泳ぐ続ける事となるのだろうか。

ここに独りで留まり続ける玉梓とは違って。

別にそれでも構わない。

それは、玉梓が望んだ事なのだから。

夏目と過ごしたあの日々は、単なる気まぐれ。もしくは何かの間違い。

そして間違いは正され、玉梓は元の孤独の日々へと回帰する。

だから、これで良かったのだ。

寂しいなんて露ほども思わない。

むしろ寂しいだなんてそんなくだらない感情、一切湧いてくるハズが

「……ほつとけなかつたんだ」

やがて一時の静寂を破つて、夏目がぼそりとか細く呟いた。伏せられていた視線はいつしか玉梓の方へと注がられ、その瞳は強い意志が込められた光に満ちていた。

今までとは違い、不意にどこか雰囲気が変わった夏目に内心動揺しつつ、

「放っておけなかつたとは、どういう意味だ？」

と眉をひそめて訪ねた。

「初めてお前と会った時、知り合いに似ているって言っただろ？」

その知り合いってのはな、おれのとでも大切な人なんだ」

「大切な人……恋人か何かか？」

「そうじゃない。両親が物心が付く前に亡くなって、そのせいで親戚中をたらい回しにされてどこにも身寄りのなかったおれを、嫌な顔ひとつせず厚意で引き取ってくれた人　感謝してもしきれない、とても温かくて優しく家族みたいに大切な人なんだ」

「……………」
両親の他界　それは幼かった頃の夏目にとって、どれほどの苦痛でどれほどの苦勞だったのだろう。それも夏目の精彩の欠いた口調からして、その親戚とやらにもどうやらあまり良い思い出もなかったようだ。

夏目の言う、玉梓とよく似た知り合いという人間以外は。

どこにも行き場のない天涯孤独の身だった夏目にとって、それはどれだけの光だったろうか。きつと地獄に垂らされた蜘蛛の糸にも近いものだったというのは想像に難くない。

いや、蜘蛛の糸というよりは、神そのものが差し出した手と表した方が適切か。

蜘蛛の糸は容易く切れるが、繋がった手は互いが離さない限り決して切れる事の無い強固な繋がりなのだから。

玉梓には、そんなものなんて無かった。

いつだって独りだった。

独りで生きるしかなかった。

独りで生きる方法しか知らなかった。

少なくとも、妖となった今では。

だから、羨ましいなどとは思わない。

羨ましいなどは、思えない。

「……………愚かしいな」

夏目の言葉を聞いた後、玉梓はそう毒づいて吐き捨てる。そんな他人を勝手な物差しで哀れみ、くだらない私情だけで関わろうとした奴を、間違えてでも羨ましいなどと思えるはずがないではないか。「お前は、その恩義を感じている知り合いとやらに似ているという理由だけで、ワタシと共にいようとしたのか？　愚行だな　そして愚考だな。誰とも関わらず、他を拒絶して独りであり続けようとするワタシを見て不憫でも思ったか。くだらん　そんな安易な同情をかけられる覚えもなければ、世話をかけられるほど落ちぶれた覚えもない。」

ワタシは好きで孤独で居続け、好きで孤高であり続け、誰に望まれるワケでもなく孤立を選んでいただけ。ゆえに誰かしらと慣れ合うつもりなど毛頭無い。

第一、その知り合いがワタシに似ているから何だと言うのだ。所詮似ているだけの別人だ。全く別個の存在なのだ。

だからお前が、ワタシに構う必要など

「それだけじゃあ、ないんだ」

と、玉梓の言葉を途中で遮る夏目。強い口調ではなかったものの、はつきりと否定を含んだ言い方だった。

突然の事にしばし面食らう玉梓をさて置いて、夏目は言葉を紡ぐ。「確かに、最初はほんの同情からだったのかもしれない。知り合いに似ている人が独り寂しくいる様を見て、放っておけなかった……それが理由だったのも否定はしない。

でもな、玉梓と会っていく内に、次第に玉梓はその知り合いじゃなくて、おれに似ていたんだって気付いたんだ」

「……お前に？」

ああ、と夏目は静かに頷く。

「実を言つとな、おれも少し前までは人間が苦手だったんだ。親戚中をたらい回しにされていた頃のおれは、自分でも呆れるくらい不器用な奴で、妖との付き合い方もよく分かっていなくて、そのせいでよく周囲の人達を怖がらせてしまっていたんだ。

そのせいなんだろうな。親戚の人達は皆おれを疎ましく思うようになっていったって、学校や近所の人達もみんな不気味がっておれを遠巻きに避けるようになってた。

そりゃそうだよな。誰もいない所を指差して人がぶら下がってるとか牛の化け物があるなんて言い出したら、みんな気味悪がるのも当然だ。だから、おれが独りぼちになるのも無理のない話だった。みんなに邪険に扱われて人を恨みかけた事もあったけど、何より、みんなに迷惑ばかりかけている自分が一番嫌だった」

淡々と語り続ける夏目を、口を挟む事もせず黙って玉梓は耳を傾

ける。

言葉にはし難い、共感めいた何かを覚えながら。

「おれの居場所なんてどこにも無くて、心休まる時も殆ど無かった。いつも人や妖を避けて行動する事しか頭に無かった。いつしか早く大人になって、独りになる事ばかり考えてたんだ。今の玉梓は、そんなおれとそっくりなんだ。本当は誰かの温もりを求めていたのに、独りでいるしかなかった、あの時のおれと……」

「玉梓をジツと見つめる夏目。まるで波の無い海面のようなしんと静まり返った瞳に見つめられ、玉梓はただ沈黙を保つ。」

「なあ玉梓。教えてほしい。なぜそこまでお前が人間を嫌うのか。お前の言い方だとまるで、過去に人間と何かあったように思えてならないんだ」

「……………」
玉梓は何も言わない。夏目の真摯な瞳を受けても尚、何も言葉が発そうとはしない。

「いかほどの時間が過ぎただろうか。実際は大して時間など過ぎたはしないのだろうが、体感的には何時間も過ぎたかのように思えるほどの、長くて重苦しい沈黙。その沈黙を破つたのは「今にしてみれば」という、不意に発せられた玉梓の呟きだった。」

「今にしてみれば、自分がいかに無力で愚鈍で矮小だったかと思うほどの、何て事のないくだらない話だ」

過去を反芻するように瞳を閉じて、玉梓は口を開く。

「今まで誰にも話した事の無い 誰にも話そうともしなかった、淡い過去に思い馳せながら……」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6316y/>

夏目友人帳～触れ合う二つの孤独～

2011年12月11日08時48分発行